道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

いるだけで癒されるオフロード。みんな笑顔で私もニッコリ！

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～http://www.fairytale.jp/～

先月は20年ぶりのマスツーリングでしたが、今月はパリダカ以来のオフロード三昧でした。「カフェが忙しくて」を理由にトレランもバイクもなかなかできなかったのですが、どこかで人生（折り返し？）のスイッチが入ってしまったのでしょう。「ならば平日に行けばいい」「休むことも大事」という訳で、毎週一回私だけのお休みを頂き、その1日を「遊ぶ」ことにしたのです。

実はオフロード林道に連れていってあげたい女子がいたので、まずはその子の予行練習ために大町のクローズドコースを借りました。すると、平日なのに26名もの参加あり。見学者も同じくらい集まって、一大イベントになってしまいました。年齢層が高いので集まれた訳ですが、故にみなさん気配りが凄くて、見学スペースは椅子やカーペットや飲食山盛りで、一気に運動会状態。かつてのモトクロス選手が数名いたり、初心者と言っても道路走りのベテランばかりでしたが、タイヤをオフ仕様にしたカブやリッターバイク、旧車のオフロード車わんさかで、どこまでも遊び心いっぱい。地元のホンダドリーム店からは、試乗車を3台も出して頂いたのですが、雑誌の取材があったお陰で排ガス規制クリアした250ccの新型セローも試乗できるというオマケ付き。指導者4人の中には、エンデューロでゼッケン10番をつけている若手もいるという恵まれすぎなイベントでした。しかも当日は半袖で見学できるほどの暖かさ。雨の合間だったのに、コースコンディションも最高で、終始みんなニッコニコ。最後は初めてのオフロード体験をした明美さん（普段はカワサキのZ800乗り）も、笑顔でコースを周回できるほどに成長。1日でここまで変われるから、オフは楽しい。「できた！」という嬉しさでどんどんのめり込んでいった過去をふと思い出しました。

さて、明美さんの林道ツーリングを11月半ばに控え、コース選びのための試走ツーリングを2回も敢行。地元のバイク屋さんや林道マニアやエンデューロレース関係者など数名で行ったのですが、こちらも大騒ぎでした。信州の山道が凄すぎて、「本番、もうなくてもいいね！」とみんなでニッカニカ。紅葉、天気、アルプスが当たり前のようにそこにあり、峠や山頂では絶景だらけ。初心者コースを探していたのに、雨やがけ崩れなどで、日陰のコーナーは泥濘んだり、動く大きな岩がゴロゴロあったりと、いきなり中級～上級コースに変身します。我が家の裏と同じように猟師さんや送電線や林業管理者の軽トラクラスが通る道ですが、それが道というものと妙に納得。全部がフラットで日が当たるなんて道は滅多にありません。「ここは明美ちゃん無理かなあ」でも、「こんなところに行かせたい」気も、ちらっ。道は生きています。どこかへ繋がり、どんな細くても全部の道に歴史があるからオモシロイ。両日初夏のような陽気に恵まれたのですが、そこにカエデやイチョウなど様々な落葉が交互に現れ、夢の中かと思うような美しさでした。隠れ石がいっぱいなのでこの時期は油断禁物なのですが、素直に燃えて&萌えまくりました。

ああ、足りません。人生の時間が足りません。毎週行ったとしても、信州の山を網羅するのはとうてい無理。生まれて初めて「もっと時間が欲しい！」と思いました。それほど数多くのオン&オフの山道が存在する信州。今回は、筑北村、麻績村、信州新町、生坂村、大町（美麻、八坂）、池田町といった地域でしたが、人々の暮らしも含めて、改めて魅力を感じました。騒音を出さないように道を荒らさないようにと留意しつつ、ライダーにも何か「道をテーマにした地域振興」ができないかなあと、本気で考えてしまいました。自然そのままのオフロード林道は、緊急時のリスクも高いのですが、心洗われますね～。カモシカ3頭もいたし♪

林道行く前にクローズドコースで練習中の明美さん。すっごく上手くなったよ。

ゼッケン10の和田卓也選手と夢のランデブー走行。こんな日が来るなんて♪

久々のモトクロスでみんな終始笑顔。平均年齢は50歳近いかも～。

信州新町の舗装林道は、どこも最後の紅葉。止まるとすぐ撮影会に

アルプスが展望できる大町の林道。仲良しの渡邊きえさんは林道走りのベテラン。

都市計画の中の道路⑯

街路から見た田園都市（その４）

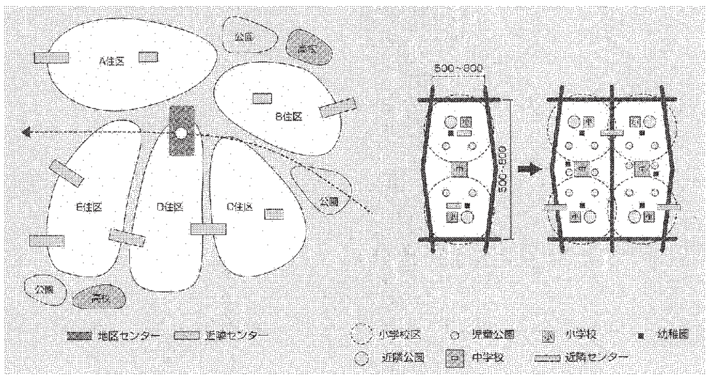
東洋大学国際学部・准教授
志摩憲寿

年代も地域も大きく異なりますが、今回は多摩ニュータウンを取り上げたいと思います。「やっぱり！」とお感じになる方も多かろうかと思いますが、その通りで、多摩ニュータウンは、日本において、ペリーの近隣住区論をよく取り入れた事例として有名です。

東京都西方の多摩丘陵に位置する国内最大級の多摩ニュータウンは、面積およそ2884ヘクタール、計画人口およそ34万人で、1965年に開始された事業は、東京都、東京都住宅公社、UR都市機構の施行による新住宅市街地開発事業と既存集落の土地区画整理事業を中心に進められました。多摩ニュータウンの開発にあたっては、住宅建設の効率性を優先して大造成を行いましたが、とりわけ開発初期のプランニングには近隣住区論に忠実なものが見られました。広大なニュータウンは、小学校2校区・中学校1校区をおおよその単位とした21の街区に分けられ、各住区には、小中学校や公園のほか、商業施設などから成る「近隣センター」を各住宅から徒歩で、なるべく均等に配置しており、これらの施設は団地内通路や歩行者専用道路のネットワーク状に配置され、一方で、集積効果を上げるために住区の接点である幹線道路上に配置するなど、歩車分離も徹底しています。

この多摩ニュータウンも少子高齢化に伴う再生が強く求められています。例えば、第1期で開発が進められた諏訪・永山地区では、「健幸都市」をコンセプトとして、利便性の良い鉄道駅周辺に医療・子育て・福祉施設を配した拠点を再編しながら地区全体の再生に動き出しています。まさに現代版の「近隣住区論」が実践されようとしているのです。

参考文献：住宅・都市整備公団南多摩開発局（1996）「TAMA NEW TOWN 事業概要」、多摩市（2018）「多摩ニュータウン リ・デザイン 諏訪・永山まちづくり計画」



多摩ニュータウンの構成概念図
（出典：住宅・都市整備公団南多摩開発局（１９９６））

近隣センターの現在

ハッと思いました

近頃、坂道が多いと感じる事が増えてきました。階段を避けるようにもなりました。何でもないところでつまづく事も多々あります。

対策は、肩掛けバッグで両手をフリーにし、階段では手摺のそばで軽く手が触れる状態で歩くようになりました。

災害はマニュアル通りには起きません。災害時の対応マニュアルはあくまでも対応の基礎の基礎で、現場対応、現場判断が最も重要ではないかと思います。

わが身に降りかかるであろう災難は、地震、雷、豪雨、強風、熱波、寒気だけではありません。

通り魔にあうかもしれない。逆走車が、居眠り運転者が、酒酔いのクルマが向かって来るかもしれない。煽られるかも、進路妨害されるかも。曲がり角から自転車が飛び出してくるかもしれません。世の中にはいたるところに危険がわんさかあることをいつも忘れずに注意して過ごさなければならないのです。

やっぱり
焼きイモが
一番だあ～！。

が、今日のお昼、食事を済ませて戻る途中、ビルの外、通り（歩道ですが）に、またもや大勢の人がたむろして、スマホの画面をスリスリしているのです。場所柄、子供はいません。オッサン、オバハンが、それはもう夢中になって・・例のあのゲームを・・。この先ニッポンは大丈夫かなと只々心配です。

心配ついでに、先日、二年遅れでオープンした豊洲市場ですが、早くも数々の不具合が出ているようです。輸送トラックの荷下ろし現場での出来事。現在は荷台のパネルがウイング状に大きく開く「横開き」になっていますが、荷下ろし場は、後ろの観音扉を開けて作業するケツ付けタイプ。こんなバカげた設計で運用するなんて、信じられない。現場を知らない、現場の意見を聞いてない証拠でしょう。

きっと、スマホで何もかもが事足りると考えている人が携わったのでしょうね。